

第十三席 遍照の攝取

一念の  
落ちる  
機  
念の  
落ちる  
機

一 今日(けふ)は墮(お)ちる機(き)と云(い)ふことを一遍(べん)話(わ)をする。眞宗(しんしゅう)ではお助け(たす)けが二つある、正(ただ)定聚(じやうじゆ)の御助け(おたす)けは今(いま)の御助け(おたす)け、墮(お)ちる機(き)を今(いま)阿彌陀(あみだ)さんに引受(ひきう)けて貰(もら)ふ御助け(おたす)けにあふことが南無(なむ)、南無(なむ)になつた機(き)を娑婆(しゃは)五十年(ごじゅうねん)渡(わた)りづめにまもつて貰(もら)ふ、それが阿彌陀佛(あみだぶつ)の御助け(おたす)け、其御助け(そのおたす)けに今(いま)あふ事を南無阿彌陀佛(なむあみだぶつ)の六字(ろくじ)の御助け(おたす)けといふ。今(いま)

助(たす)けて下(くだ)さる謂(いは)れが南無阿彌陀佛(なむあみだぶつ)。今(いま)御助け(おたす)けにあふ、命終(いのちのしゆう)つて御淨土(おんじやうど)へ參(まゐ)らせて貰(もら)ふのと違(ちが)ふ。それを一つ話(わ)したい。御助け(おたす)けに今(いま)あづかつてしまつて墮(お)ちると轉(ま)じかはる、地獄(ぢごく)より行場(ゆきば)の無い、墮(お)ちるより仕方(しかた)の無い此奴(こやつ)が何時(なんじ)命終(いのちのしゆう)つても、それは後念(ごねん)、一念(ねん)の墮(お)ちる機(き)と後念(ごねん)の墮(お)ちる機(き)は全然(ぜんぜん)品物(しなぶつ)が違(ちが)つて居(ゐ)る。その事(こと)を今(いま)から一つ話(わ)したい。一念(ねん)といふものはかう、後念(ごねん)は斯(か)う、一念(ねん)の墮(お)ちる機(き)は一念(ねん)でとれる、後念(ごねん)相續(さうじゆく)の墮(お)ちる機(き)は棺桶(くわんぼく)に這入(はい)る迄(まで)とれぬ奴(やつ)。品物(しなぶつ)がコロツと變(かは)つて居(ゐ)る。

棺桶(くわんぼく)の  
中(なかに)まで  
離(はな)れぬ  
機(き)

所(ところ)が此(こ)の後念(ごねん)相續(さうじゆく)の墮(お)ちる機(き)といふものは棺桶(くわんぼく)までとれん。日々(にちごとく)夜々(やや)欲(ほ)しや憎(にく)や可愛(かわい)いや、地獄(ぢごく)より行場(ゆきば)の無い此奴(こやつ)を助(たす)けてお呉(くれ)れる、之(これ)は後念(ごねん)相續(さうじゆく)の喜(よろこ)び、一念(ねん)は三世(さんぜ)の業障(ごふしじやう)一時(いちじ)に罪消(つみき)えて正定聚(じやうじゆ)不退轉(ふたいてん)などいふ位(くらい)に住(す)。こゝの所(ところ)を今(いま)から話(わ)したい。私(わたし)が始終(しじゆう)話(わ)して居(ゐ)ることであるが、一念(ねん)も後念(ごねん)もゴチャ／＼になつて居(ゐ)るから、サアとなつたら何ん(なん)にもないが、出(で)て來(こ)らんらん。之(これ)は一念(ねん)がわか

遍照(べんしやう)の攝取(しやくしゆ)

らんから多念もわからぬ。そこで一念の時に相手になるのは我にまかせ我たのめ、之は欲しい可愛いと違ふと云ふ事を知らんならぬ。之は久遠劫より三悪道に持つて来た迷ひの根源、無明業障の恐ろしき病ひ、これが一念の時とれる。一念の時に迷ひの根源となるくらやみがとれて萬劫の命拾ひをする。

平生の時善知識のことばの下に歸命の一念發得せば此時を以て娑婆の終り臨終と思ふべし。

## 念力業力

一念歸命の當體に、身は迷ひの凡夫ちやが魂だけはもう迷ひの根ぎれをしてしまふ。此時ちやんと墮ちん事にきまつてしまふ。一念の時にちやんと墮ちん機になつてしまふ。何故かと云へば墮ちる機は阿彌陀さんがとつてしまふ、代りに阿彌陀さんの墮しはせん念力を渡した、雜行雜修自力の心がすたつて、引受けるといふ親切に落着いた事、納得した事、そこで一念に萬劫の命拾ひをする、眞宗では正定聚の御助けと滅度の御助けと二度立てる、墮ちる機が一念の時とれて墮

ちん機に轉じかはる、墮ちる機は彌陀にたつた今受持つて貰ふ、受持つて貰ふからこつちになくなる、今度此方にあるものは阿彌陀様の引受けるといふ親切である。受取るといふ親の大慈悲心が私の胸の中にある。そこで今墮ちる機がとられて、雜行すて、後生たすけ給へと、引受手に安心すること落着くこと、夜明けする事、心がすはる事。斯う思つたあ、思つたといふ事で無い、引受手の親切に得心した事。雜行すてる勅命が、我にまかせ、親の親切を届ける方が我をたのめよ。御助けありつるは一念、御助けあらうするは後念の事、斯ういふ風に一念後念を分けてあるのである。

一念は魂に後念は體に

二 一念の方は今御助けにあふこと、多念の方は命終つて御淨土へ參らせて貰ふ事、一念の方は魂につく、後念の方は身につく、忘れまいぞ。一念は雜行すて彌陀たのむ、萬劫の命びろひする、身の方でない魂につく、後念の方は御助けあらうする、身につく、一念の方は無明業障の恐ろしき病ひ、墮ちる機が御助

煩惱が  
喜びの  
縁

けにあづかる、後念相續は身について起つて来る三毒の煩惱の墮ちる機。一念の方は魂についた方、後念の方は身についた方、一念の魂についた方の暗闇は欲しい憎い可愛いに關係しない、今往かんなら、まつくらがり、之が久遠劫より持つて来た暗闇、三世業障のかたまり、之が阿彌陀さんの受持つ引受けるといふ品物。後念相續は、魂だけは御助けが濟んで、墮ちん事にはなつてしまつたが、此身は前生の業のつきる迄どうも出来ぬ。煩惱が慶びの縁となつて、欲しい憎い可愛い此奴を此機のなりで往生、と喜ぶのぢや。御助けありつるの方は魂の方、御助けあらうするの方は身の方、心身命終、魂の命の根絶れと身の命の根絶れと二度。是が分らぬものだから、心の運びがつかぬ、一念多念の運びがつかぬからいつまでもいら〜せんならぬ。此心身命終といふ事は三代目覺如上人の一代の間の御骨折り、御開山の御化導、平世業成の御化導はこれよりない。

超世の悲願きしより

われらは生死の凡夫かは

有漏の穢身はかはらねど

心は淨土に住み遊ぶ。

吾々は阿彌陀さんの本願が聞こえてから迷ひの凡夫ではない。さうすると姿形は昔と變らぬ、膿血の垂るきたない身、有漏の穢身は變らねど、變つた事が一つある。心は淨土に住み遊ぶ。これでなければ平生業成は立たぬ、御助けありつると御助けあらうすると二つある。御助けありつるは一念、御助けあらうするは後念。

三 一念の時無明業障の恐ろしき病は渡しきり、身についた方は臨終迄のかん。そこであなた方は眞宗の教義は分つて居るであらうが、淨土眞宗では、欲しや憎みや可愛やの三毒の煩惱は往生の邪魔にならぬ、地獄の種にならぬ、何かなる、疑がなる。お前さんよく知つて居る、凡夫直入の本願、凡夫が凡夫なりで佛になる。そこで、「この光明の縁に遇ひ奉らば無始より此方の無明業障の恐ろしき病ひ

地獄種  
は何か

のなほる事あるべからず」「三世の業障一時に罪消えて」と仰しやる、「されば無始以來つくりとつくる悪業煩惱を一時に消滅し」といふ御化導がある。言葉は違つても品物は同じ事。今往かんならん、眞暗がり、之は欲しい憎いと違ふ、欲しい憎いは其生々で變れども、此暗闇一つは生を變へても變らぬ、一念の時の相手は何か、三毒の煩惱でない、後生となつたら眞暗がり、未來となつたら行場知らず、それは私が言ふ迄もなく御和讃の一番初めに其事がお示しになつてある。

彌陀成佛のこのかたは

いまに十劫をへたてまつり

法身の光輪きわもなく

世の眞冥をてらすなり

法身の  
光輪

兆輩永劫修行して成佛より今迄十劫其間何して居つた、法身の光輪きわもなく、御慈悲の光明にきわほとりなく後生となつたら盲ぢやぞ。未來となつたら暗闇ぢ

やぞ。冥はめしひ、此世の盲でない三世の盲、此眞暗がりを受持つために待ち兼ね居る。一念はこれで行かんならぬ、欲しや憎や可愛いや、此機ならよく分つて居る。サアとなつたら何にもない眞つ暗がり、こゝが阿彌陀さんの引受ける一念の相手。これが久遠劫より持つて來た迷ひの根元、聽聞の仕様が悪いと欲しや憎くや可愛いや、此機御助けのやうに思ふ、これは一念でない、眞宗では之を後念の喜びに扱ふ。一念の方はあんた方よくやつて居る、欲しや憎くや可愛いや此機のなりで御助けと疑はれて居る、此機のまゝで參らせて貰ふと落着いては居るけれど今と何んにも掴まへ所が無い、どうしよう／＼之が一念の時阿彌陀さんの御助けの相手になる。之が世の眞冥、三世の盲、之が久遠劫來より持つて來た迷ひの根元。之を除けるには、之を自分で除けやうと思へば三僧祇百大劫の修行。之はよく説明した事があるが、あなた方説教で聞くだらう、三僧祇百大劫といふのはどういふことかといふと一大阿僧祇、二大阿僧祇、三大阿僧祇といふこと

がある。

三大阿  
僧祇劫  
の説明

一大阿僧祇の修行と云ふのは年月時間で云ふたら、時間の長いことを七萬五千萬の佛の出世に出會ふ。佛と佛の間がどの位の年限か、五十六億七千萬年、話にならんわ。それが三僧祇、どの位長いかわからぬ。其間にどうする十信十住十行十廻向の四十段、四十二段目が初歡喜地の菩薩、七高僧の中では龍樹、其間に身について起つて來る欲しい憎いがぬける。それが一大阿僧祇。それから龍樹菩薩のやうに初歡喜地になつてから七萬六千の佛に會ふ間が二大阿僧祇、其間何を除けるか、吾々の眞つ暗がりの無明を取る、これは十五萬一千の佛に遇はんとこれない。そこで今此光明の縁に遇ひ奉らざば無始より此方の恐ろしき病ひの治るといふ事は無い、自分で除けたくば三僧祇百大劫、四十一段目の初歡喜地まで、欲しい憎い可愛いを除けて、それから菩薩になつてどうする、菩薩になつてから除けるものが二大阿僧祇の修行、十五萬何千の佛に遇つて除けるものが無明の暗闇、

こまかう聴き分けよ。之を取つて除けるのに十五萬何千の佛に會はんと除れん。

お前さん説教で聴いた事があらう。五十一段等覺補處の彌勒、等覺といふのは彌勒菩薩の位、それが佛になるのに一番近い、それでも御和讃にあるぢやらう。

五十六億七千萬

彌勒菩薩はとしをへん

まことの信心うるひとは

このたびさどりをひらくべし。

其五十六億七千萬年何をするかといふと、まだ一分の無明がある。髪の毛の先についた埃ばかりの無明がある、之を除る間が五十六億七千萬。えらい事ぢやね。お前さん等は何とも思つて居らんが、今となつたら眞つ暗がり、三僧祇百大劫の修行せんとつて、此儘ぢやらうか、はつて置かうか、はつきりせんがこんなものぢやらうかとやつて居る。おかしなものぢやね。あんた方はたい助かる事ばかり

一分の無明を  
除く七十年  
億五十七千

聴くで何んとも思はぬ。大體之が一番難かしい事で、これを除つてのけねば佛になれぬ。其暗闇を除るまで一分の無明がある。等覺補處の彌勒でも佛とは僅か一段髪の毛ばかりの暗闇であるが、それを除けるのに五十六億七千萬年。これをお前さん。一願一行もつとめた事なしに、此儘ちやらうか。放つておかうか、變なもので聞こえたらどうかなるだらう、戴けたらしつかりなるだらう、うまい事を考へて居る。菩薩になつてから二大僧祇たんと除れん。一願起した覺えもない、一行努めた覺えもない。聞こえたらはつきりするだらう、ようまあ考へて見い、おかしな話だ、それで眞宗では此機の事を疑と名付ける、さういはいんどわからんからさういふのであるが、暗闇の事、此暗闇が久遠劫より三惡道を引きずりまはされ欲しや憎やとやつて來た煩惱のかたまり。

## 佛光照耀最第一

光炎王佛となづけたり

## 三途の黒闇ひらくなり

大應供を歸命せよ。

三途の黒闇閉ぢるなりと書いてあるか、皆閉ぢるなりとなるわ、御和讃を作りかへてやるから可かぬ。佛光照耀最第一、光炎王佛となづけたり、三途の黒闇閉ぢるなり、大應供を歸命せず、いつも閉ぢてばかり居る、面白いな。それは御開山いけません、之は私の機に合はんから作りかへますと行け、皆んなさういふ事になつて居る、三途の黒闇と云ふのは三惡道の迷暗、之が一遍に除れてしまふ。お前さん勝手に除るなら三僧祇百大劫、之は聞こえたらどうかなるだらう、戴けたらどうかなるだらう、貰へたらどうかなるだらう、明けても暮れても凡夫様かえらい事をやつて居る、菩薩になつて初歡喜地の菩薩まで十五萬何千の佛に遇つて除けなければならぬものを凡夫様が除けやうとする、えらい〜感心する。よう之は考へねばならぬ、これが分らんと生涯骨折る、何ぼう打骨つても駄目、

遍照と攝取

私が斯う云つたら自分で分る事があらう。

五 淨土眞宗の同行は、たゞ助かる事ばかり聞いて居るから、自分の心の中は、どういふものだと云ふ事を知らぬ。自分の胸に持つて居るものを知らずに居る。自分の持つて居る品物が解らぬ。阿彌陀さんの遍照の光明と云ふ事は、どういふ事かと云ふと、阿彌陀さんの光明の働きには遍照の光明の働きと攝取の光明と二つある。遍照の光明の働きは御化導聽いて我影を見せて下さる、其遍照の光明の働きの頂上は、どこまで來るか、暗闇を見せて下さる迄は遍照の光明の働き、之が第一番の働き。俺が一遍話した事がある。

遍照の三徳の善を熟せしむる徳

六 遍照の光明の三徳と云つて之に三つの徳がある。一つには宿善を熟せしむる事。闇闇を見せて下さる事。初めは、どうもなかつた、ちやんと蓮臺の上へ三遍位坐つたことがある。段々聽聞して行くやうになつて初めて暗闇と云ふものを見せて下さる。どうも手に物を握つたやうに確かにならん、之が第一の働き。何と聞いて

二に無明斷破の徳

も何と聽聞しても心に得心は出來て居つても、之がぬけぬ、此暗闇が目に着いたのが遍照の光明の御養育にあつた第一歩。初めは、之は分らぬ、此儘御助け、此儘參らせて貰ふ、無茶若茶に御淨土へ往つてしまふ。段々聽聞するに從つて往けんやうになる。自分の胸が承知せん、愈々となると何にも無い。あれは遍照の光明の第一の働きに出遇つた、宿善が熟して來た所。

第二番目の働きが無明斷破といふ、暗闇を除つてしまふ。暗闇を見せて第二番目に除つてしまふ。我にまかせよ、之は無明斷破の徳。一番初めは宿善が熟して來て、此第一の遍照の光明の働きに出會つたならば、間違ひない、大丈夫參らせしてお呉れると承知はして居る、此儘とわかつては居る、けれども今となると何やら掴まへ所が無い、困つた、初めは遍照の光明の御養育によつて我身の胸が見えて來た。之を宿善潤熟の徳といふ。自分の胸の中に無明業障の恐ろしき病ひのある事が初めて目に着く。これが遍照の光明の働きの第一歩になるぞ。そ

れから第二番目の無明斷破、見せて置いて除つてしまふ。我にまかせよ〜で除つてしまふ。

三に佛  
心廻向  
の徳

第三番目は、之を除るなり佛心廻向と云つて、之を除ると同時に引受けると云ふ親切を此胸に届けて下さる。之を遍照の光明の三徳といふ、三つの働きをもつたものだといふ。初めはあなた方は心配も何もない、それが自分にチラ〜見え出す、之が遍照の光明の網にかゝつた事、之れが宿善の催しにあづかつた事。之は私が言ふ迄もなく、初めの間聽聞して居ると一遍に御淨土へ往つてしまふ。死んだら此儘、何んにも要らぬ、ツーツと行つて蓮臺に坐つて居つた。段々御化導に遇ふに従つてチラ〜自分の胸が見える。何んにも無いが、これでよからうか、苦しみ出す。自分の聽いた事も益には立たず、覺えた事も間にあはず、知つた事も用にはならぬ、愈となつたら何んにもなしの眞暗がり、ごうしよう〜となつて來るだらう。此見せて貰ふ間の事を第一宿善の熟する働き、第二番目に

見せて  
置いて  
除く

無明斷破見せて置いて除つてしまふ。初めは無明の病ひのある事を知らない、初めの間は後念相續の喜びを見て、他の同行が喜ぶのを聞いて眞似した、俺も眞似してやりませうと頻りに眞似をやつて見た。此欲しい悪い可愛い地獄より行場の無い此奴を此儘參らせてお呉れる、御信心貫つた、嬉しい〜と喜んだ。段々聽聞するに従つて、愈となつて、此儘參らせてお呉れると解つては居る、サアとなるど何んにも無い、ごうしよう〜。段々々々聽聞するに従つて我身の胸の中に我身の聽いた事も役には立たず、覺えた事も間に合はず、知つた事も役に立たぬ。向ふさんに疑ひは無いが、此胸が眞暗がり、ごうしよう〜と思ふだらう。之れが宿善の熟する遍照の光明の第一歩の働きに遇ふ所も、これから無明斷破で除つて下さる。其勅命が「まかせよや」之を無明斷破の働きといふ。それを除ると同時に「我をたのめよ」佛心廻向の働きが現はれる。もう愈となると、聽いた事も覺えた事も知つた事も何んにも間に合はぬ、サアとなると成る程困つ

光明の  
作用



た〜、困つたら俺にまかせよ、除つて貰ふ、無明斷破の所御信心は要らんとぞ。疑ひ晴れる、夜明けするの心配は要らぬ、後生となつたら行場持たず、自分の胸が解つたら、それを受持つために十劫以來待ちかねて居る。一念の時はそこを聴く。此時は欲しい悪い可愛いは關係ない。此機のなりは分つて居るけれども、此機のなりで參らせてお呉れるとは分つて居るけれども、サアとなつたら何んにもない、之は欲しい悪いと違ふ。眞つ暗がり、此光明の縁に遇ひ奉りて、無始より此方の無明業障の恐ろしき病ひ、是が久遠劫より三惡道をへめぐらうち欲しや悪や可愛いやとやつて來た煩惱のかたまり、之が阿彌陀さんの五劫永劫の相手になつた。

私一人  
は落ち

七 一念と云ふ方の墮ちる機と云ふものは暗闇の事である。暗闇とたゞ言つては解るまいが、愈々暗闇を詮じつめると、參らせて御呉れるも分る、助けてお呉れるも分る、大丈夫の御慈悲も分る、向ふさんは大丈夫と思ふけれども、どうも參れ

相に思へません、裏から言へば墮ち相な。人は墮ちはなさらんが、私ばかりは墮ちるより仕様が無い。そこを受持つ。今迄は自分も欲しい悪いの地獄行き、人も欲しい悪いの地獄行、今度は人は參らしやつても、私一人はどうしても參らせてお呉れん、墮ちるより仕様が無い、そこを受持つ。宿善開發の機はそこまで行く。

墮ちると知つたらそこを受持つ、解らん所は俺が受持つてやるで、俺にまかせよ、之が無明斷破。暗闇が一遍に除けてしまふのぢや。往ける往けるの心配はそなたがするので無い、無始以來無明業障の盲で解らぬ、それを受持つてやるぞ俺にまかせ。今度此方の方は往ける往けるの世話要らず、引受手の親があるなら、此方は暗からうが明からうが關係ない。明かであるか、そんな事には用事は無い、暗い明い、そんな事は要らぬ、何んで、引受手があるもの。マア樂になるからやつて見たい。暗いか明いか、暗い明いには要らぬ、自分で往かうと思ふたから暗い明い気がなつたが、今日は自分で往くのでない、引受手がある

暗い明  
要らぬ

から暗い明るいには關係は無い。そこがはからひのやんだ自力の棄つた我機の方に目の附かんと云ふ所。今迄は親を持たず、今は親を持つた所の丈夫さよ、と行くのぢやぞ。今迄は親を除けて自分だけで考へて居つた、今は阿彌陀さんの引受けるといふ親切に落着いたから、往ける往けんは關係ない。言はせて見たいネ――

ごうぢや御浄土参りは、そんな事は關係ない。しつかりあるか無いか。今は用事はない。御浄土参りはやめた、何故やめた。受持つ親がある。やめて呉れ。御浄土参りはやめんで阿彌陀さん一寸く、とやるからいかん。御浄土参りのやうな事はやめぢやぞ。往生を手離して攝取の彌陀をたのみ。往生の手を離して命懸けでも引受けるといふ彌陀を力にする。御浄土はやめにやいかん往ける往けんはやめ。参れるかごうぢや、そんな事はやめ。やめてごうする、引受手がある。往ける往けんは向ふのはからひ。何が有難い、墮ちたら、そなた一人はやりやせんで共に此彌陀が焰の中迄離れはせんで、親を親と得心して當にせよ。力に

往て手離し  
彌陀取  
のたぬ

せよ。雜行すて、彌陀たのみがこゝに出た。

往ける往けんの世話だけは此彌陀にまかせ、参る参れんの世話だけは此彌陀が受持つてやる。親は正覺の命懸け。萬が一つも受持つて墮いたら、そなた一人はやりやせんで、此彌陀も共に焰の中までも離れん約束が若生者の誓故、地獄極樂は放つて措いて、親を親ぢやと得心して、此親と一緒に來る氣になれ、當にせよ力にせよ、雜行すて、彌陀たのみが出て來た。

然らば往ける往けんの心配はやめ、参る参れんの世話はやめ、墮ちる墮ちんの世話もやめ、墮としなされるも彌陀のはからひ、参らせてお呉れるも彌陀のはからひ。墮としなされてもよろしうございます、参らせてお呉れるならば尙結構。そこはあなたのよいやうにして呉れ、心のきまりは、彌陀がたよりになる、阿彌陀さんが力になると行くのぢやぞ。

かう行かねば腹が滿れまい。さう行かねば心の坐りがつくまい。墮としなされる

も彌陀のはからひ、參らせてお呉れるも彌陀のはからひ。心のさまりは、命懸けでも護つて離れせんなら、これ程丈夫な事は無いのぢやぞと、落着くのぢやぞ。落着いたと云ふやうな落着きと違ふ、無明業障の恐ろしき病ひを引受けて御呉れる、引受手に安心すること。當にせよ、力にせよと引受手の親切に安心する。

御袖縫り御文説教 終